

研究結果報告書

姿を消した幻の染物が現代に蘇る
－日本夾纈工芸研究－

所属：中国美术学院
役職：教授
氏名：鄭 巨欣

調査研究の結果が示すように、日本夾纈工芸の源流は中国にあるが、中国に似た独自の体系的な工芸発展の系譜を有することが明らかであり、両者の繋がりも非常に密接である。日本は夾纈研究及び保護において、多くの成果を収め、社会に多大な貢献を果たした。そのため、中国人研究者にとって参考となる点が多い。

1、夾纈の発明は中国にあり、盛唐に流行した。8世紀中頃、中国夾纈は遣唐使によって日本に持ち帰られ、皇室珍宝となり、屏風や佛幡及び服飾などの生地に使われるようになった。今回、日本の正倉院で行なった資料調査によって、中国夾纈が日本に伝えられた最も早い記録を確認することができた。天平勝宝八年六月二十一日付けの献物帳に「山水夾纈屏風十二畳」という記載があるところから、夾纈の東伝説に有力な証拠を提供してくれた。

2、中国人研究者は唐代より流行し始めた夾纈と、10世紀以降に現れ、近代まで継続し続けた板締めを夾纈と総称する。一方、染色家石塚広氏へのインタビュー調査を通じて、日本学界では夾纈工芸の発展を夾纈と板締めの二段階に、明確に分けられることが明らかとなった。前者は特に8世紀から10世紀以前に流行していた夾纈を指し、主な特徴は五彩夾纈である。後者は主に17世紀から20世紀中後期の板締めを指す。このような緻密な工芸区分法は中国人研究者に新たな見方を示してくれた。

3、日本に比べると、中国は夾纈の保護や研究におけるスタートが遅れ、深い理解に至っていない点もある。特に古代夾纈工芸の復元実験及び保護において、日本の正倉院では、1950年代には既に始まり、現在では大学や民間の染色工芸家らもこの研究に携わっている。このような広範囲な保護や研究の現状は中国人研究者に多くの経験を提供してくれた。

4、吉村家資料や伝統工芸による紅染めの現場調査により、「中国と日本との共有文化遺産として、夾纈工芸を保護し、研究すると同時に、如何に伝統工芸を現代デザインと結びつけ、今日の文化生活に生かし、充実させるかは中日両国が目指すところであろう。」として、「たかさき紅の会」代表吉村晴子氏と共通認識を持つに至った。さらに、インド夾纈は夾纈工芸から切り離すことのできない一部として、嘗て夾纈生産の歴史があったインドについても研究視野に入れなければならない。中国、日本、インド三ヶ国間における夾纈工芸の淵源や交流を研究し、それによって明らかとなる東方物質文化の特色や特徴などこそ、今後共に注目すべき新たな研究動向であろう。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「日本夾纈的源流、保存及研究考略」鄭巨欣

中国美术学院学報『新美術』2015年4月

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)